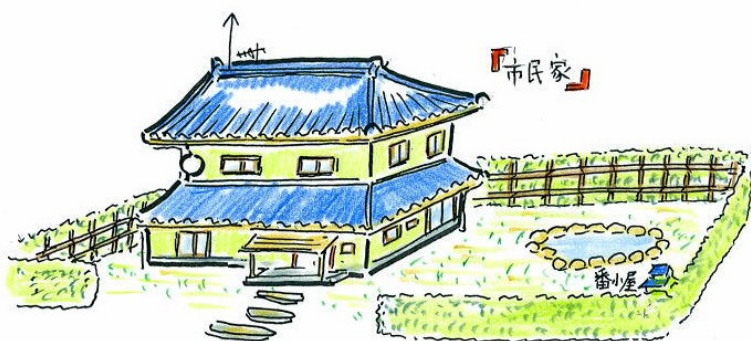


# ★★ 支援くんの火災予防奮闘記 ★★ これまでのあらすじ

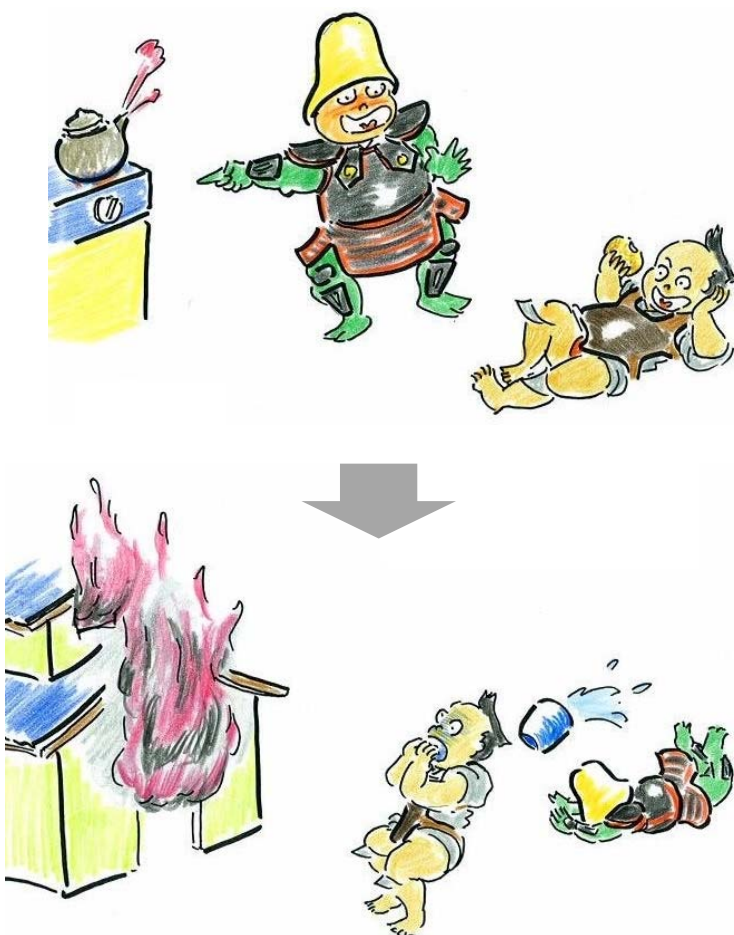
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



家来の<sup>ちゅうげん</sup> 中間 ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くん比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん<sup>えん</sup> には何故か二人の姿が見えるようになったのです。

点得幼稚園<sup>てんとく</sup>の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだあい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。



ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの

**火災予防奮闘記** をどうぞご覧ください。

# 支援くんの火災予防奮闘記

## ～火災を起こさないために～

Vol.42

---

### 前号のあらすじ

---

晩春の兼六園、酒で酔ったご助を残し、蕨とノブキ採りに夢中となった拙者（支援くん）は広大な栄螺山の山中で道に迷う。切り株にへたりこんだ拙者は、背後の藪から現れた月の輪熊から全速力で逃げるも、「ま、待って下せえー」と追いかけてくる熊に飛び掛かれ失神してしまう。しかしその月の輪熊は、被り物の中に入ったご助じゃった。

帰り道を探して栄螺山を彷徨する主従は赤く小さく光る場所を見つけるが、赤い点が大きくなると、いつの間にか姿を消したご助。訝りながら赤い点に到着した拙者が目にしたのは枯葉が燃える炎の明かり、炎の中では熊が、いや、熊のような生き物が、炎を踏みしだいて消していた。ここは確かご助が泥酔し、寝たばこをしていた場所。拙者に悪事を悟られまいと先回りしたものと思った拙者は…

---

拙者は炎の中へと飛び込むと、火の着いた枯葉を踏み始めたのじゃ。



活動すること十数分、ようやく下火となったのを確かめた拙者は、振り向きざま

「この大馬鹿者めが！寝たばこするなとあれほど言いつけておいたものを、

まだ懲りぬのか！」と熊をしかりつけたのじゃ。

「ググウ？」と頭をかしげる熊・・・。

「ええい、いつまで被り物をしておる、さっさと脱がなか！」と、熊に近寄っ

た拙者はその大きさに肝を冷やしたのじゃった。

「い、いやご助、こ、これは・・・」と、突然大きくなったご助を前に言葉を  
失い、立ち尽くす拙者の背後から

「だ、旦那様、旦那様！そいつぁ本物ですぜ！！と小さく声を掛けるものがおった。

「本物？本当にご助がこんなに大きくなったと言うのか？」と驚く拙者に、  
件の声が再び

「ち、違いますぜ旦那様。本物だって。早く逃げて下せえ。」と更に小さな囁  
き声が・・・





「ええい、うるさいやっちゃん。誰じゃい、先ほどからごちゃごちゃと囁いておるのは？」と振り向いた先には、熊のぬいぐるみを着たご助の姿が

「貴さま、貴さま！あれほど寝たばこすなっと・・・うん？ご助がそこに・・・前にも？」と戸惑う拙者の背後で巨大な何かが

『グオオオオオッ』と大きな雄たけびをあげたのじゃった。

「旦那様あ、熊じゃっ、逃げて下せえっ」と言うや、ご助は我先に藪の中へと駆け出しておった。

「ま、待たんかい！主人を置いて逃げる中<sup>ちゅうげん</sup>間がおるかっ！」と叫び、拙者はご助の後を追ったのじゃった。



「ひいいい、だ、旦那様、付いて来ないで下せえよお！」と、わめきながら逃げるご助を

「痴れ者め！お、おのれも道連れじゃあ」と拙者は必死に追いかけたのじゃった。

ドドドドドドドドと、背後に迫る熊の足音！

逃げる先に巨大な倒木が拙者らの前方を塞いでおった。

「ひいいい！」「な、南無さん!! もはやこれまで・・・」と

覚悟を決めた拙者とご助は熊に向き合ったのじゃった・・・

拙者らを追い詰めた熊は、仁王立つと

「グル、グルル、グルルウ？」と唸り声をあげた

く、食われる・・・と目を瞑った拙者の横でご助が

「グルル、グルルウ、グルルルウ。」と真似るように唸り始め、やがて

「グル、グル、グル」と拙者を指さすではないか。



「ち、違うって、熊殿。こ、こちらのお方じゃ。」と

「わ、分かるのかご助？熊公の言葉が分かるのか？」と聞く拙者に

「だ、黙ってて下せえよ。生きるか死ぬかってときなんですぜ。」とご助に言

われ拙者は口をつむぐしかなかった。

「グルル、グル？」と熊の確認するような仕草に

「グル、グル、グル・・・ほ、本当だって・・・あ、慌てて消そうとしておっ

たのが何よりの証拠じゃねえーすか。」と答えるご助に





「こ、こら！何を聞いているのじゃ熊殿は？」と詰問すると

「だ、だから熊さんは寝たばこしたのはどっちだって聞いてるんでさ。」

「そ、それで、そちは何と答えたのじゃ。」

「決まってるじゃねえですか！寝たばこ仕出かしたのは、こ、このウツケじゃ。」

と思わず喋ってしまってから

「あ、あわわ、ち、違いますぜ。あっしがやりましたって答えましたが・・・

信じられます？」

「そんなもの信じられるか！」と叫ぶ拙者に、熊殿は一步近づくと、両手を上に立ち上げたのじゃった。

「わあああ」としゃがみ込む拙者の様子を

「旦那様っ」と、しおらしく両手で覆った指の間から笑顔をのぞかせるご助。

その股間から 『カラン』と 何かが音を立て地面に落ちたのじゃった。

それは、ご助が大切に禪の中に隠し持っていたライターとタバコじゃった。



直後、『ブンッ！』という音とともに、熊殿の右前脚が拙者の頭上で空を切ると、熊殿はジャンプ一番、巨体を宙でよじるとご助の方へと向きを変えたのじゃった。

「???'」

拙者が熊殿にのされる姿を期待していたご助が、不思議そうに熊公殿を見上げると、熊殿の手にはご助愛用のライターとタバコが・・・。

熊殿は手にしたライターとご助の顔を交互に見据えながら、ご助との距離を縮め始めたのじゃった。

禪に手を当て、事態を悟ったご助は

「えっ、えへっ、えへへへ」と、助けを求めるように、泣き笑いの顔を拙者に向けてきたのじゃった。



その姿を黙殺し、拙者は熊殿に

「グルル、グル、グウウルル。」と話しかけた。

「だ、旦那様？熊様とお話が出来ますので？あ、あっしの無実を・・・」と懇  
願するご助に

「ああ、おのれのことをお話したところじゃ。」

「ありがてえ、さすが旦那様じゃ。で、熊様にはなんて？」と笑顔で聞くご助に  
手にしていた山菜を松の根元に植えなおしながら拙者は、

「昼ひなかに大酒吞んで寝たばこで山火事を起こし、その罪を人になすりつけ  
ようとする大ウツケに、生涯忘れえぬ罰を与えて下されとお話ししておいた。  
さあて拙者は先に帰るとするか。では熊公殿あとはよろしく。ご助、ゆっくり  
りとな。」と梅園をあとにしたのじゃ。



「おお、夜明けじゃ。今日あたり桜も蕾をつけるかもしれぬの・・・うめえ～  
は～咲い～た～か、さくう～ら～はまだかいな～」との名調子に、拙者の背後  
の森から

「ひiiiiiiiiii・・・」という悲鳴が 合いの手のようにいつまでも響いて  
おった。



季節は春・・・方々、新緑が芽吹くまで山菜取りなどで入山される際には、  
山火事に十分ご注意めされよ。

(おわり)